

千葉集会から千葉大会へ—千葉県歴教協の力を結集しましょう

榎澤和夫(事務局長)

去る9月18日、千葉市中央コミュニティーセンターで、第46回総会が開催されました。会員18名(昨年21名)が参加し、約4時間にわたり活発な議論が展開され、事務局提案の議題は全て承認されました。今回の総会は、来年に控えた全国大会千葉大会(以下、千葉大会)に向けての第1回実行委員会も兼ねて行いました。実行委員会での議論については、榎澤全国大会事務局長から報告がありますので、ここでは総会で議論された課題について報告したいと思います。

千葉集会を千葉大会のステップに

2月の松戸集会は、去年の千葉集会と同様、学生・院生の参加が多く(25名)、市民参加者数(23名)を越えました。学生の多くがボランティアスタッフであり、7つの大学の学生が参加しました。集会参加者が約100名でしたので、参加者の4分の1が学生だったことになります。しかし学生参加者が増えている一方、若い現職教員の参加者がほとんどいなかったことが最大の課題です。小・中・高ともに新規採用者が増えています。昨年度は小学校が789名、中高社会科は95名が採用されています。総会では若い教員に対して、歴教協活動の魅力をどう伝えればよいのか、そしてどうすれば活動に参加してもらえるのか、その具体的な方策を考えていくことが確認されました。

来年の1月28日(土)～29日(日)に開催される第45回千葉県歴史教育研究集会(以下、千葉集会)、ならびに千葉大会は、若い教員にアピールする絶好の機会となります。特に千葉大会のプレ大会と位置づけて取り組む千葉集会は、全国大会と同じ千葉大学が会場です。200人規模の集会にしたいと考えています。地域実践報告は浅尾弘子さん(千葉支部)が、前任校である泉高校での授業実践を振り返り、社会科の学力論を提起してもらう予定です。この報告は千葉大会の閉会集会で行われる地域実践報告にもなります。記念講演の講師は久保田真さん(愛知県立大学)にお願いしました。久保田さんには千葉県歴教協が取り組んできた、地域に根ざす、子どもに根ざす活動の総括とその今日的な意味を語っていただく予定です。レポートの最終締め切りは11月の県委員会開催日の11月27日となります。千葉大会では各分科会に2本以上のレポートを出すことを目

千葉県歴教協の集大成が

1枚のDVD(2011年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2011年改訂版」)は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言って過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならぬと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり振り返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

標にして取り組む予定です。そのためにも千葉集会には多くのレポートを結集する必要があります。各支部からのレポート推薦をよろしく願いいたします。

東日本大震災にどう取り組むか

2011年3月11日東日本大震災が発生し、約2万人の犠牲者が出ました。震災の復旧と、その後起きた原発事故の収束は、現在に至るまで遅々として進んでいません。原発事故は、東京への一極集中、大量生産と大量消費、原発依存のエネルギー構造など、現代の日本社会のあり方を再検討することを提起しています。

福岡大会では閉会集会で被災地からの緊急報告がありましたが、来年の千葉大会では震災関連の特設の分科会が開設され、全国から授業実践報告が集まるものと思われます。特に千葉県では東総地区の津波被害や浦安をはじめとする湾岸地域の液化化被害、そして東葛地域の放射能のホットスポット問題など地域特有の問題が生じています。授業の中で大震災をどのように取り上げ、復興への展望をどう見出すのか、私たちに求められている緊急の課題です。

中学校社会科教科書採択の動向

今年の夏は中学校の教科書採択が最大の話題となりました。採択の結果、千葉県の公立学校では自由社版・育鵬社版教科書は採択されませんでした。また、6年間自由社版を使っていた杉並区も不採択になりました。しかし一方で、横浜、藤沢、東大阪、武蔵村山などで育鵬社版が採択され、歴史は4万5千部、公民は5万部、シエアはそれぞれ3.8%、4.2%となり、前回の10倍以上の採択数となりました。

総会では育鵬社版の「躍進」をどう考えるのが議論になりました。前回の採択から危惧されていたことでしたが、各自治体の首長が選任する教育委員5名の多数決で決まるといいうシステムの問題性が改めてクローズアップされました。「つくる会」系の運動が、大衆運動から保守系の首長にターゲットを絞り込んだ政治運動へと変わったことに、十分に対応できなかったのではないかとといった指摘もありました。教育委員の入れ替えに際して、どのような見識を持った人物が委員に選任されるのかを注視するとともに、教科書を使う現場の教員の声を採択に反映させるような採択のあり方を引き続き求めていきたいと思えます。

今回の採択では、船橋をはじめいくつかの地区で教科書採択のための会議が公開され、私たちが求め続けた主張が一部実現しています。公開されていない地区の公開を求めるとともに、引き続き教科書ネットとの連携を深め、「つくる会」系などが編纂した教科書を批判的に学ぶと同時に、その問題点を明らかにし、市民に広める運動を展開することを確認しました。

「おはなし千葉の歴史(仮称)」の出版

千葉大会までに2冊の本を出版する予定で取り組んできましたが、お知らせしましたように、「実践本」については引き受けくれる出版社が見つからず、残念ながら断念せざるをえませんでした。前田徳弘編集長をはじめ編集委員の方々にはご迷惑をおかけしました。

一方、「地域本」については岩崎書店からの出版が決定し、古代から現代にわたる千葉の歴史を55のテーマに分けて執筆に取りかかっています。第1次原稿集約の段階が終わり、栗原克榮編集長を中心として編集委員による原稿の読み合わせを行いました。小学校高学年以上が理解できるというコンセプトに合わせるために、編集委員会での要望を各執筆者に伝え、第2次稿のリライト要請を行っている最中です。今年中には完成稿に仕上げたいと考えています。この「おはなし千葉の歴史(仮称)」は千葉県歴教協の活動のひとつの到達点を示すものとなります。特に小中学校の若手教員を千葉大会に誘う重要な手段として活用していきたいと考えています。

全国大会に向けて—総会の議論から考えたこと

柄澤 守(千葉大会現地実行委員会事務局長)

いよいよ大会の日程が決まりました。8月3日(金)の全体会は習志野文化ホールで、4・5日(土・日)の分科会は千葉大学で実施されることとなります。第1回実行委員会と位置づけた総会で

は、大会のビジョンを明確に提起するところまではいきませんでした。議論では、東葛地区の「ホットスポット」調査の問題、千葉県内の震災被害の実態をどの程度つかんでいるのかという問題などが話し合われました。

「なかま」7月号では、付け焼刃的な対応に目を奪われがちなどきだからこそ、原点にかえって歴教協運動の有効性を確認し、震災と原発の問題が現在進行形で拡大しているなか、大会に向けて私たちが何を取り組み、何を発信していくべきかを考えていきたいという趣旨の提案をしました。しかし、来年の8月時点で復興がどの程度進むのか、原発の状況がどう変化するのかが読めない以上、大会でこの事件をどのように取り上げていくのか、課題は重く、そして不透明です。正直なところ、歯切れのいい提起は危険だという気がします。

私の勤務校に福島から避難してきた3年生の女子生徒がいます。転学は一家転住が条件ですから、親子ともども千葉に転居してきたのですが、(大きな声では言えませんが)実際は母親は福島に戻って仕事をし、彼女は千葉市に住む姉一家と生活しているようです。実家が幸い津波の被害を免れているので、母親は安定して収入を得るために戻るといった選択をしたのでしょう。進路希望は入寮が前提の看護専門学校です。卒業後、姉の家に厄介になるわけにいかず、しかし屋内退避を余儀なくされていた福島の実家にも帰れないのですから、この進路は選択の余地がなかったというべきでしょう。救いは、彼女自身が、先日行なわれた体育祭で応援団に加わり、汗まみれになって踊り叫び、濃厚な学校の雰囲気溶け込んでいることです。

考えてみると、彼女からじっくりと震災のことやこれからの生活についての思いを聞いた職員は、担任を含めて誰もいないと思います。授業担当者である私も、クラスでは福島の問題については触れにくいです。組合から支給された奨学金を手渡す際には激励もしましたが、なかなかそれ以上突っ込んだ話にはなりません。転校してきてから5カ月経っているのに本当にこれでいいのでしょうか。

実行委員会での議論を聞いているうちに、彼女のことを思い出しました。わからないことだらけなのは全国のなかまも同じでしょう。ならば大会を情報交換と学び合う場にすればよいのではないかと。「総括」などと風呂敷を広げてみても、原子炉の現状についての報道がパツパツなくなったように、情報操作されている現状では展望のあるものはできないでしょう。それよりもまず知ること、学ぶこと、そしてそこから明日につながるものを引き出すことが大切ではないでしょうか。道路や鉄道の整備をどう進めるかとか、電力をどう確保するか、などという土俵で考えては歴教協らしさは発揮できないでしょう。子どもたちの命と地域の生活を課題の核心に据えて、事態の本質をじっくり観察するところから始めませんか。

第1回実行委員会では具体的な行動の提起も行いました。各支部に企画・運営をお願いしようと考えている「地域に学ぶ集い」と「現地見学」について、原案を至急練ってください。ただし「現地見学」は月曜日ですから公共の施設は基本的に休館になりますので、具体案を作成する際にはご注意ください。年内には内容を確定したいと考えています。また『歴史地理教育』に来年1月から連載される「現地特集」の原稿を随時依頼していきますので、ご協力をお願いします。

石井さんを悼む

石井建夫先生、ありがとうございます

加藤公明(会長)

10月13日午後1時から都内北区の西蓮寺で、石井建夫先生の告別式が行われました。しめやかな、しかも先生を慕う参列者の温かい思いに満ちた葬儀でした。歴教協からは山田朗委員長や白鳥晃司副委員長も参列され、多くの会員が先生の旅立ちに立ち会いました。先生の経歴や業績については、新著『はてなの社会科』(国土社、2011年)の巻末に次のようにまとめられています。

「千葉県市川市公立小・中学校に勤務、途中退職。日本福祉大学子ども発達学部教授・社会科教育担当。元歴史教育者協議会副委員長。主な著書に『最新 中学 公民の授業』（民衆社）、『子どもが主役になる社会科の授業』『日本史 歴史教科書の争点 50問50答』（ともに共著、国土社）、『朝日ジュニアブック・日本の歴史』（共著、朝日新聞社）、『中学校社会科 歴史の授業』（共著、大月書店）、『教職入門』『新版社会・地歴・公民科教育法』（ともに共著、学文社）などがある。」

上記の文章を引用していくうちに、先生との思い出がさまざまに想起されてきました。

先生が、私の母校である市川市立第四中学校に勤務されていたときのことですが、長女も四中に入学することになり、親子でご挨拶に伺った際、温厚な先生から「いっしょに頑張ろうね」と娘にやさしく声をかけていただきました。その娘が大学に入学したときに「うちの大学で石井先生の授業がある」と喜んでいました。

あげられている著書のなかには、ごいっしょに原稿を寄せたり、本づくりをともにさせていただいたものもあります。先生からは多くのことを学ばせていただきました。先生の社会科教育に対する姿勢は一貫して現場主義で、授業をする教師やその授業を受ける生徒にとって教えがいのある授業、学びがいのある授業をいかに創るかに徹しておられました。そのベースとなったのが、ご自分の長い現場教師としての実践経験であることは言うまでもありませんが、その経験を分析し、意味づけをして「はてなの社会科」として理論化する研鑽の場こそが、先生にとっての歴教協でした。大学4年の夏に大野泰江さんの紹介で入会されたそうですが、「社会科のロマンを求めることの素晴らしさを学びました」と述べられています。先生が歴教協活動の中で発見し、魅了された「社会科のロマン」とはなんだったのでしょうか。その答えは次の先生の提言のなかにあると私は考えています。

「私が、ここ数年、意欲的に取り組んでいることは、歴史の出来事や社会現象に対する生徒たちの問いかけを大切にすることである。生徒たちが学習の主役になるためには、生徒たちが主体的に学び始めることをしくむ必要がある。生徒たちが学び始めるということは歴史、社会現象に問いを持つことから始まる。そして、その問いを説き明かしたいという意欲が出てきたとき、生徒は学習の主役となる。」

千葉県歴教協が前回の全国大会（千葉大会）の開催を期に、自分たちの実践を全国の仲間に発信するために刊行した『子どもが主役になる社会科』のなかに、先生の「歴史に問いかけながら学ぶ 象の旅から見えてくる鎖国」が掲載されており、そのなかで書かれた文章です。

自ら歴史に対して問いをもち、なかまとともに歴史を主体的に探究していく。そのような授業で見せる生徒たちの目の輝きに先生は教師としての喜びと社会科のロマンを感じられていたのではないかというのが、私の答えです。そして、それは私自身にとっても求めてやまない社会科のロマンであり、その思いをこれから社会科（生活科、地歴科、公民科を含む）の教師になろうとしている若者に伝えたくて、私は自分が非常勤講師として担当している社会科教育法の講座で、中学校歴史の授業の学ぶべき実践例として先生のこの実践を毎年紹介し、学生に熟読・分析をさせています。ベトナムから長崎に連れてこられた1匹の象が、なぜ遠く江戸まで行かなければならなかったのか。その理由を生徒たちはさまざまな仮説を立てて追究していきます。そのような授業に社会科の魅力を感じて教職への道を歩む学生がなん人も現れます。その意味で先生の「はてなの社会科」はこれからの社会科教育に確実に受け継がれ、発展していくことでしょう。われわれ千葉県歴教協に集う後輩たちにとっても先生の「はてなの社会科」は、今後の自分たちの実践や研究を導く貴重な指針として折に触れて参考にさせていただきたいと考えております。

石井先生、長い間ありがとうございました。合掌。

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。
chibarekkyo@csc.jp
また、職場や地域のこともぜひご投稿ください。(M)

合掌 石井さんどうもありがとうございました

白鳥晃司(松戸支部)

石井建夫さん。ここのところずっと難病と闘っておられていたのですが、亡くなられたとの報を受けて、残念で残念でなりません。

石井さん。もつともつとたくさん教えていただきたかったです。また、その後、私の学習していることについてもご意見をいただきたかったです。それができなくなり残念です。

石井さんが出された著作集『はてなの社会科』(2011年)のサブタイトルは「再び“希望と生气”を語る社会科を」でした。石井さんの渾身の力が込められて発刊されたものだと思います。石井さんが今まで実践されたことや歴史教育に対する考え方(思想)が凝縮されているのだとあらためて実感しています。石井さんの実践と、そのもととなる思想は、市川支部の方々とともにつくられたと思いますし、全国の社会科・歴史教育だけでなく、千葉県歴教協のなかにしっかりと位置づけて学びなおすことが大事だと考えていましたところ、本当に残念で仕方ありません。

石井さんは小学校がスタートで中学校に転勤されました。石井さんが中学校に移られたと伺ったとき、中学校の免許しかなくて小学校教員となった私も、中学校に移りたいと思いました。

千葉県歴教協会誌13号『現代の子どもと平和教育—子どもがたのしくわかる社会科』(1982年)に、石井さんの実践報告「個人の尊厳と歴史の授業」があります。「非行行為に走っている生徒」がいる中での「生徒指導の難しさ」を肌で感じることができ、そのなかで社会科・歴史教育はどうあるべきかを論じられたレポートです。私は、非常に多くのものをこのレポートから学ばせていただきました。子ども・生徒の見方や、授業をどう組み立てていくのか、実践した授業を自分なりにどう総括・分析していったらよいのかなど具体的で、今でも強烈な印象が残っています。

ここでは「歴史学習において個人の尊厳をどのように授業で追求して」きたかを振り返えられておられます。授業タイトルの一つは「対馬からみた秀吉の朝鮮侵略」です。「朝鮮に近く、これまでの関係から」「戦争状態になったら一番影響をうけるとおもわれる対馬から秀吉の朝鮮侵略を考えさせようとした」とねらったものです。この実践記録には、生徒たちが自分のこととして対馬の人々に身を寄せながら秀吉の朝鮮侵略について考えたことが、授業での子どもたちのやり取りとともに授業後の感想としても示されています。

私たち松戸支部も、子どもたちの「実感づくり」があってこそ授業が成り立つのではないかと提案しているときです。私も「なぜよりもどのように」ということを提案しているときでした。ですので、それこそ共感して石井さんの実践・提案で共通するものについて整理するなどができました。学びの主体である生徒が、歴史に生きた人々の主体に迫りながら考える。これこそが「個人の尊厳」に迫ることになり、それが教育、子どもたちが主権者として成長することを保障することに繋がるのだということです。

『はてなの社会科』には、その後の石井さんの実践されたものや歴史教育の思想がびっしり詰まっています。社会科・歴史教育が危機にあるときです。再度、読ませていただいて、今後どんな教育が望まれるのか考えてまいりたいと思います。

石井建夫さん。どうもありがとうございました。合掌。

■福岡大会に参加して

世界史と教科書問題

川鍋光弘(世界部会)

世界史の教員が本職のはずであったが、ここ数年は「つくる会」系中学歴史・公民教科書の採択阻止運動に特化してしまったようで、欲求不満がたまりつつある。大会はいつも世界部会に参加

してはいるのだが。

今年の世界部会の初日は大学院生など若い参加者が目立って積極的な発言もあり、歴教協世界部会の展望が開けたかと思っただが、二日目にはその人たちの姿はまったくみえず、相変わらず少数のヴェテランたちの高度な論議の展開であった。若手や専門外や市民たちがわいわいがやがやとやって来てよかったと思える集会にしたいですね。兆しはみえてきているのですが。それにはテーマの選定からレポート募集まで意識的、計画的に準備する必要があるんでしょうね。

レポートは4本、少ないようだがそれだけに十分討論が保証されてよかったともいえる。越川さんの小学校への出前授業「陶磁器の授業」は具体的でわかりやすく、質問や意見も多く出た。欲を言えば、もう一本、陶磁器の果たした世界史的歴史的な意味などを考えさせるレポートを用意してもらって、みんなで論議すると若手や学生などに大変役立ったかと思われる。

「エルトウルル号事件」についての実践報告は、育鵬社版歴史教科書の主張するエルトウルル号事件とは根本的に異なった世界史的歴史的な視点にたつ重要なレポートであったが、論議は「つくる会」系歴史観や教科書問題までは深まらなかったように思う。「日清戦争と朝鮮についての日本史教科書記述の検討」も『坂の上の雲』批判＝「つくる会」系歴史観批判を含意しつつ詳細にレポートされたが、討論は歴史認識や教科書問題にまでは及ばなかった。

「世界史の新しい考え方」は、最近の世界史研究のめざましい進展、中国史・東南アジア史・中央アジア史など地域史の捉え方の転換や世界システム論からグローバル・ヒストリーにいたる世界史論の変化を包括的に説明された大変参考となる理論的なレポートであったが、世界史教育はどうあるべきかにまでは討論はすすまなかったようにおもわれる。

歴史教育は、いま、危機に立たされている。「つくる会」系勢力の中学歴史教科書は日本会議の政治的活動に強力に支えられて、地方議会の圧力で採択が広がりつつある。高校世界史の選択者は激減し、必修を外されれば存続さえ困難な高校さえあるようだ。世界史教育の動向はそのことに無責任でいいのだろうか。たとえば、国民国家などという語義さえ不明確な用語の横行は国家の本質を曖昧にし、偏狭な愛国心の育成に利することはないだろうか。中核・周辺の変動などという二次元的な見方の流行はあらたな大国主義を生むことにならないか。まして、ヨーロッパは産業革命・東アジアは勤勉革命ととらえると進んだヨーロッパ・遅れたアジアという単純な優劣の見方を相対化できるとなると、大東亜戦争はアジア解放の戦争という見方からどれだけ遠いのだろうか。それとも国語の問題ともいえるかもしれない。研究者の自由な考え方を直ちにすべてとりいれるのが歴史教育であろうか。世界史教育の教科書問題といったら言いすぎであろうか。世界史離れ対策として、学術会議で、世界史に日本史をとり入れた「歴史基礎」なる新科目を検討中という。新科目を検討するより、教えるべき内容や歴史認識を育てる方法を考えるべきではないか。西洋史・国史・東洋史三分法から脱けきらない世界史でなく、世界史・日本史二分法から脱けて「歴史」を考えるべきではないか。暴論すぎますね。

第11・12分科会(小学校中学年)に参加して

遠藤茂(船橋支部)

全国大会では小学校中学年分科会に参加した。今年から3年生分科会と4年生分科会が統合され中学年分科会となった。しかし報告本数が多かったために3年生分散会、4年生分散会の形式となり、昨年と実質的な変化はなかった。私は4年生の世話人をしているため4年生分散会に参加した。報告本数は7本だったが私が「授業づくり講座」の報告も担当していたために報告者は6名であった。

まず、私の報告した2本の内容からお知らせしたい。1本目は「2年間を見通した中学年社会科の進め方」と題した報告である。指導要領で「中学年の目標」として提示されているように、3年生と4年生で単元を分ける必要がなくなっているということである。つまり教科書によって一部分ではあるが同じ内容が3年生で扱ったり、4年生で扱ったりと統一感がなくなっているのである。昨年度まで船橋市の副読本では「昔の道具」や「昔から伝わる物」などの歴史分野は4年生で取り扱ってきた。しかし今年度の教科書を見てみると「昔の道具」と「昔から伝わる行事」は3年生からになって

いる。また、昨年まで3年生で扱っていた「消防の仕事」「警察の仕事」が、今年度の新しい教科書を見ると4年生での扱いとなっている。3年生とか4年生とかに限定する必要がないということである。したがって単元に左右されるのではなく、子どもの発達や中学年でつけさせたい能力を考慮して2年間の単元構成をしてはどうかという提案である。

では3年生と4年生で違ってくるのは何かということである。一言で言うなら抽象能力が全くと言っていいほどに違ってくる。同じ内容を扱っても3年生は現象を見ているだけである。物事の特徴を捉えたり、特色を理解したりすることはできる。少数の児童は事象の意味を考えることができるが、あくまで少数である。それに比べ4年生は現象の意味やその裏側に働く原理を理解しようとする。一つの現象には一つの意味しか考えられない一対一対応の段階から、一つの現象から複数の意味を見つけたり、現象と現象をつなぎ合わせより深い意味づけができる段階へと発達しているということである。この発達の違いは表現力の違いや言語能力の違いとしても表れてくる。したがって単元にとらわれずに単元と発達課題を関連づけた授業づくりが大切になってくると考える。

報告に対する反応はよかった。参加者の大半から意見が出て、子どもの発達の違いが授業の質に反省することがわかったとか、ゲストティーチャーの存在が子どもたちの意欲が持続することがわかった、といった意見が出された。

2本目は「昔の道具から考えるくらしの変化―昔の道具を見る・使う・比べる―」を報告した。以前は3年生で扱っていた内容であったが、船橋の副読本では4年生での扱いとなったために歴史関連の単元はすべて4年生扱いとなっている。昔と今の道具の比較をさせるが、それだけだと子どもたちは「昔は不便だった」「昔は古くさいものばかりだった」「昔は遅れた道具だった」という感想を持つ。この感想は当然である。しかし、さらに「だから昔の人は遅れていた」と考えるとしたら問題である。物の比較だけだと昔は「不便で古くさくて遅れていた」と感じるだけで終わってしまう。これでは授業といえない。昔の道具であっても当時としては最新の道具であった。それに不便な道具であればあるほど人間の技能や知恵が必要となる。最先端の道具に囲まれている現代の子どもたちは、指先を動かすだけあるいはパネルにタッチするだけで火を起こしたりお湯をつくったり、光をともしたりしている。しかし、それは道具が便利になっているだけで、道具を使う人間は器用になったり、多くの知恵を使ったりしているのかというと怪しい。そのことを自覚させるために「火おこし体験」に取り組んだ。その結果「最初は簡単そうでした。でも火をつけるのは大変でした。昔の人はこんな難しいことを毎日やっていたなんて、驚きました。」や「七輪で火を起こすのがこんなに難しいのに昔の子どもは3～5分でやっていたなんて。ぼくたちは1時間もかけてできたのに。昔の人はいろいろ工夫してくらしてきたんだなと思いました。」そして授業の最後には、「昔の道具のイメージは電気を使ってないというものでしたが、道具に触れてみていろいろな人の知恵がたくさん込められているんだなと感心しました。」などという感想を持つようになった。

参加者のほとんどが同じ単元を経験しており、自分の経験をもとにした意見が多かった。特に火起こし体験に関する質問や意見が多かったのがうれしかった。子どもの認識が変化していくようすをレポートに書いておいたので、授業の進行とともに変化していくようすを読み取ってくれた点がよかった。

大阪の山下さんは「市町村たんけんたい」を報告した。まだ若い先生で子どもたちの興味を引きつける授業を工夫しているようすが見られ大変好ましい印象を持った。単元としては4年生の終わりにやる都道府県の授業である。マンホールの絵柄から市町村の特徴をつかみ、好きな市町村に手紙を書いて質問するという授業であった。各市町村は子どもたちの質問に答えるだけでなく、パンフレットやマスコット、タオル、シールなどをもらい大変喜ぶと同時に盛り上がりのある授業発表となった。

北九州市の高津さんは「ぺさんと子どもたち」を報告した。ぺさんは在日2世で在日の存在と歴史的な背景を知らせることを生涯のテーマとして、10年以上の年月で700回以上の交流学习を行ってきたという人物である。学校訪問時は交通費以外はすべて手弁当での授業交流を行っている。学校に限らず声をかけてもらえばいろいろな会合や集会でも話をしてきたようである。ぺさんは地域に学ぶ集い「石炭産業と朝鮮人の強制連行」でも報告している。ぺさんの最も言いたいことは、差別や偏見をなくし戦争のない平和な国や社会をつくろうということであるが、これはぺさんが直接語りかけるので伝わると思う。しかし、教師の実践報告としては課題がある。一つはぺさんに

全面的に依存しすぎて教師の主体性が弱いこと。二つ目はぺさんを通して差別や偏見のない平和の追求を考えさせるのはよいとして、教師自身の授業の中でぺさんとは違った視点で差別や偏見、戦争と平和について考える機会をつくる必要があるということである。とはいえ在日の問題を取り上げる教師の少ない中での授業と言うことを考えると、積極的に評価したい報告であったと思う。

所沢市の佐藤さんは「争いのある国の子どもたちを調べる」を報告した。新しい学校に転任し、そこで見た子どもたちの姿にショックを受け授業構想を練った結果の報告であった。食べ物が豊かすぎて粗末にする子どもたち、学校に来られることが当たり前でその良さを感じることでできない子どもたち。仲間と暮らしたり新しい知識や技能を身につけたりできる意味を感じてほしいと思い、その対極にある子どもたちを次々に登場させていった。フィリピンのスラムで生活する子ども、戦争中子どもだった大人の体験談、現在戦争の行われている国で生活する子どもたち、国際協力機構の職員の話などなど。国際協力機構の方はアフガニスタンの現状について話をした。後日の子どもたちの返事の中に「関係のない人が巻き込まれている。でもアフガニスタンの人々は平和を望んでいるし、そのためにはどうすればいいか考えている人もいる。今日話を聞いて罪のない人を傷つける戦争が止まるいいと思った」と書いている。子どもの感じていることは教師のねらい通りだったであろう。しかし、授業後の感情と教師が問題意識を感じ取った子どもたちの日常が交錯していかないと、授業の成果は反映されないままとなる。そのあたりの検証とつなぎかたが今後の課題ではないかと感じた。

上記の報告の他に所沢市の宮沢さんが「『一つの花』からハンガーマップへ」を、福岡支部から「千早校区の歴史を調べよう」の報告があった。

「人類の誕生」を歴史の授業にできるか

安井俊夫(松戸支部)

「中学校歴史」分科会では、これまであまり議論してこなかったテーマを取り上げたレポートが出された。「サルからヒトへ」(東京日本史部会・石田尚子氏)である。

石田氏の授業は、まず、ゴリラ、ジャワ原人、ネアンデルタール人、ラミダス猿人などの絵を見せて、「サルかヒトか」「サルと言いつつ切れないのはどんなところか」などを考えさせる。これらの取り組みの中から「直立二足歩行」というキーワードが引き出される。授業の山場は「ヒトはなぜ直立二足歩行ができるようになったのか」となる。

そこでヒトの骨格、特に背骨のようすを板書してみる。横から見ると緩やかにS字状にカーブしている。だからこそ、着地したとき脳への衝撃が避けられ、脳の大型化が保障される。この、人体の構造に着目させるところが、授業のポイントであった。この点について石田氏は、人類の進化について「生徒の中に残るもの」とは何か、という点からヒトの体という教材を設定したと述べている。

猿人→原人→旧人→新人、という進化の筋道、あるいは脳の大きさの比較など、このテーマの授業で扱う教材は、ほとんど子どもの中に残らない。が、人体やその構造はあまりにも身近である。自分自身のことなのだから、これは印象的だ。

だが一方、このテーマへの子どもの興味関心は、「サルはいつ、どのようにしてヒトになったのか」ということだ。「どのようにして」というのは、「サルがどんなことをしていたら」ヒトになっていったのか、サルの具体的な行動を知りたいという興味である。

だから私自身は、「木から下りたとき、食料を見つけないか。どうするか」「危険はないか遠方まで見ようと思う。どうしたらいいか」「得た食料を子どものところへ持っていきたい。どんなことをするだろうか」などと、木から下りたサルの行動を、ある場面・情景の中で考えさせ、そこから二足歩行への道を探る展開にした。

だが以前に、この授業は、進化という何万年もの歩みを、まるで「ある日のできごと」のように矮小化してしまっている、という批判を受けた。この点から見れば、石田氏の授業は人類の誕生をあくまで進化の問題として展開している。しかしそれは、「いつ、どのようにして」という子どもの疑問とは、すれ違っていることも確かだ。と同時に、「生徒の中に残るもの」の追求として、問題を提起して

いることも間違いない。考えさせられるレポートだった。

第21分科会(障がい児教育)に参加して

関根千春(鎌ヶ谷支部)

今回もレポートを持参して分科会に参加しました。東日本大震災の影響や福岡という場所のせいか、参加者はとても少なく、世話人も全員が集まらず、少しさびしい分科会でした。私も大会委員の仕事のため自分のレポート報告のみの参加になってしまいましたので、分科会のようすというより、その感想を簡単に述べたいと思います。

今回、私は重度肢体不自由の児童・生徒が在籍する現任校で数年間担当した生徒会活動について報告しました。特別活動の中で児童や生徒たちが認識を深めていくことができるということに関しては、特別支援学校のみならず中・高等学校の生徒たちにも共通することとして意見交換することができました。

それに併せて、生徒たちを指導する教師集団の課題についても報告し、問題提起しました。私の勤務校では、数年前から毎年、多くの初任者が着任します。おそらく教師集団の平均年齢はかなり若返っています。私の学年も8名で担任していますが、20代4名、30代2名、40代2名という構成になっています。また、特別支援学校の児童・生徒数の増加に伴う教員数の不足から期限付きの講師が多く採用され、毎年多くの教師が入れ替わります。初任も6年で異動対象になり、6年を経過せずに異動する先生方も少なくありません。そのため、児童や生徒たちにとって長期的な展望を持った指導体制が十分に機能しないという問題があります。さらに、若い先生方を中心に児童・生徒会活動をはじめ特別活動の指導について、自らも児童・生徒時代に行った経験がなかったり、具体的なイメージを持つことができなかつたりで、どのように指導したらよいかわからない先生方が多いようです。

肢体不自由の児童・生徒は、学習活動をはじめ学校生活のさまざまな場面で教師の支援を必要とします。児童・生徒たちの主体的な活動である児童・生徒会活動においても教師の存在、支援なしには成り立ちません。だからこそ、教師集団が、児童・生徒会活動の意義、めざすべき児童・生徒の姿について共通理解し、指導・支援することが必要なのですが、そこがうまくいかず、大きな課題になっていると問題提起しました。併せて、重度の障がいを抱えた児童・生徒たちも教師の支援を受けながら生徒会役員を担当することも含め活動に参加することを大切にすべきだと主張しました。

しかし、重度の肢体不自由児童・生徒と接したことがない分科会参加者には、その児童・生徒たちのようすがレポート(活字や言葉)だけでは、わかりずらかったようで、私の主張も十分に伝わらなかったように思います。視覚的な資料(写真やDVDなど)の必要性を改めて感じました。また同時に、まだまだ一般に特別支援学校や肢体不自由の児童・生徒について知られていないことが多く、やはり、この分科会からの発信は必要なんだと思いました。

歴教協福岡大会現地見学「伽耶の旅」に参加して

平形千恵子(船橋支部)

行程 8月1日 博多港—釜山港、釜山大学校博物館、龍頭山公園、チヤガルチ市場／2日 晋州城、晋州博物館、大城洞古墳博物館、金海博物館、鳳凰洞遺跡／3日 釜山市立博物館、福泉博物館、近現代博物館、釜山港—博多港

旧八幡製鉄に近い宿を朝食時間前に出て、博多駅からのバスを探すのに手間取ったが、博多港には集合時間の9時前に着く。玄界灘を一度船で越えてみたいと思って参加した3日間の現地見学だった。

博多港の出国は、空の旅と違って簡単に乗船できた。対馬を経由して、波は静か、3時間25分

の快適な高速船の旅だった。釜山の入国も簡単、対岸の両国の人たちが観光や買い物に気軽に行き来しているという話が納得できる。

一昨年、習八歴教協「対馬と済州島の旅」では、対馬の子どもたちは、観光客を見ると「アンニョンハセヨ」と声をかけ、韓国からは、日帰りで対馬の山に登りに来ると聞いた。晴れた日には対岸が見えるとも。近さを実感する。しかし、この近さなのに、この海にどんなに深い人の思いと歴史が沈んでいることか。船の中でそんなことを考えていた。

現地見学のコースは、「伽耶の旅」のタイトルの通り、主に先史・古代遺跡と前近代中心の博物館めぐり。3日間で七つの博物館を見たことになる。韓国史の先史・古代について、また日本との比較も興味はあるが、あまり詳しく知らない。日本から同行された専門家の中村修身さんの説明がありがたかった。土器や貝塚、古墳などの遺跡についての説明を何とか後から付いて聞いて、「伽耶の旅」にならない感想文になる。

この旅で、欲を言えば、歴教協がいつも準備するような説明・案内資料があると、もっと理解することができたのではと思った。それから日程的に無理だったのはわかっているのだから、秀吉の朝鮮侵略までではなく、近現代の歴史にも触れたかった。近現代史については、最後に予定になかった「近現代史博物館」を時間がないままに、大急ぎでざっと見ただけだった。日本の植民地時代についてどのように展示しているのかゆっくり見たかった。釜山の果たしていた大きな役割がどう書かれているのだろうか。次の機会に行けなかった慶州と合わせてゆっくり訪ねてみたいと思った。この旅のなかでもう一つ感じたのは、時代の差というのか、それとも年の差なのか、なんとなくの違和感だった。

去年の「姜徳相さんと行く韓国歴史の旅」で東学農民運動、光州事件をたどって、最後は釜山だった。姜徳相さんは、朝鮮半島と日本の歴史をとらえるのに大事な場所として釜山の龍頭山公園で「草梁倭館」と釜山の港の歴史的役割を語った。植民地時代を今も形で残している日本風家屋についても。

龍頭山公園を案内するとき、現地の韓国人ガイドは、李舜臣の像についてはふれても、すぐ下の「草梁倭館」の説明版のある場所を知らなかった。西鉄旅行の添乗員も。意図的なのか、年の差なのか。何人かで階段を下りて見に行った。

3日の朝食前に、同室の福岡の方とホテルの裏にある龍頭山公園に登り、「草梁倭館」や龍頭山公園の案内版、海兵隊司令部記念碑などを見て歩いた。「倭館」の案内板と並んでいる公園の案内板には、次のように書かれていた。

「龍頭山と呼ばれる由来は、白頭大幹という朝鮮半島の背骨である山麓が南へ伸びているが、その起伏を辿ってきた龍が海に向かっていく頭の部分にあたることから付けられた。朝鮮後期には龍頭山に草梁倭館(1678～1876)があったが、1876年の開港以後、日本人専管居留地が造成された。日帝強占期(1910～1945)には植民地釜山府の中心地であり、抗日独立運動の拠点にもなった。

解放後(1945年)、朝鮮戦争の際には、臨時首都の中央機関の一部、そして避難民のバラックがあったが、1954年12月の龍頭山大火災で焼失してしまった。

釜山港を一望できる龍頭山公園には、海拔69mの頂上に高さ120mの釜山タワーがそびえ、散策路、李舜臣將軍の銅像、市民の鐘、花時計、文化公演場、釜山出身の詩人の詩碑などがあり、国内外を問わず、観光客がよく訪れる釜山の代表的な公園のひとつである。」

ここにも多くの歴史が詰まっている。

小学4・5年の頃だったか、朝鮮戦争の新聞記事の地図で見覚えのある朝鮮半島、南のほうまで矢印は下がった。うろ覚えだが、そのころ新聞を見るようになり、社会に関心を持つようになったように思う。釜山という地名と場所もその頃覚えた。厚木飛行場から米軍機が朝鮮へ向かっていると聞いた。

近現代史の旅も丁寧にしてみたい。

*会員のみなさんから原稿をいただきましたが、石井さんの追悼文を載せるため、いくつかを次号に回します。ご了承ください(M)。